2020.6.25
No.113

真宗大谷派名古屋教区教化センター センタージャーナル

Center Journal

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目８番55号
TEL（052）323-3686
FAX（052）332-0900

立つ！いのちの大地に
聞く！いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

３月から休止が続いていた名古屋別院の定例法話は、感染対策を施し６月から再開された
（写真の無断転用はご遠慮ください）

もくじ

・聖典研修　第３回
『教行信証』撰述の願い　真実の教　❷・❸
・現代社会と真宗教化
希望とは何か　❹・❺
―牛と荒野と放射能の中で
・研修報告
第13期研究生 報恩講勤修　❻・❼
わたしにとって「報恩講」とは？
・INFORMATION　❽
◆イラストカット集〈※寺報などにご利用ください〉

自他尊重の妙薬

収束の兆しが見えない新型コロナウイルスの感染拡大により、我々の社会生活は大きな変容を余儀なくされている。現在分かっている新型コロナウイルスの特徴は、元気だった人を突然重症化させ死に至らしめる一方で、一定の割合の感染者には自覚症状が出ないことである。自覚症状が出ない感染者は、よりウイルスを拡散させてしまうリスクが高いことから、行動自粛を促す「Stay Home」が全国で連呼された。

かつて経験したことのない緊急事態宣言下、改めて連合いの家事の大変さを思い知ったり、御同行が抱える不安の声を懇ろに聞くことができた。そして、我々の生活がいかに他者との密接な関係と依存とによって成り立っていたのかを憶い知らされたことである。

それにしても、新型コロナウイルスの感染拡大とともに、我らの奥底に潜む「差別と偏見と排除」が顕著に表出しはじめた。正義と秩序を盾に、他者（ひと）を孤立に追い詰め排除する動きが世界中に拡がり、言いようのない閉塞感が世を覆ってきたように感ずる。

新型コロナウイルスには、いずれワクチンや特効薬が完成するだろう。しかし我らの生活の中に自覚されることなく潜む病悪「差別と偏見」は、他者を排除するための暴力を肯定し、人々のいのちを蝕み続けていく。孤立した人の口から微かに絞り出される悲痛な声を、私は聞こうとしているか。その人に寄り添い、空しく過ぎることのない人生を往きようとしているか。自問自答する私がいる。

自身に蔓延（はびこ）る「差別と偏見」を自覚するには、先の歴史に学び、自身の中に潜む病悪の根を止観するより他はない。大谷派における「被差別部落」や「無癩県運動」などへの関わり、そして今なお悲しみも痛みも感じぬまま無自覚に読誦され続けている『観無量寿経』禁母縁の「汚刹利種・是栴陀羅」の経言との関わり。私自身、それらの問題を学ぶ研修会に幾度となく参加してきた。しかし、受講した「経教」はあれども「浄土の真宗は証道いま盛なり」という実証がないのである。「足を踏まれた者の痛みは、踏んだ者には解らぬ」と語られるその人の悲痛な声を、自身への問いかけとして往きてきたか。

末法五濁の世において、自他尊重の「南無阿弥陀仏」という妙薬が効用するとき、悲痛な声に耳を傾け続けた「愚禿」の姓と共なる道が開けてくるのであろう。

（主幹　荒山　淳）

聖典研修

2019年10月28日

『教行信証』撰述の願い

第三回　真実の教

講師　一楽真氏（大谷大学教授）

未来の仏とは？

「教巻」は短い巻ですが、親鸞聖人はここに「仏に遇う」ということの根本問題を示してくださっています。仏に遇わないのに「これが仏教だ」とは言えないはずです。「私は仏教を信じています」と言っても、それは自分が仏教だと思い描いたものを掴んでいるだけかもしれません。「仏に遇う」ということ無くして仏教ということは成り立たない、言われてみればその通りですが、私たちは仏教用語をたくさん学んだりすると、仏教がだんだん分かってきたような気になったりします。でもそれは自分の考えを固めているに過ぎないということがあるのです。

その代表が「教巻」にも登場する阿難という人です。阿難はお釈迦様が亡くなるまでの約二十年、旅のお供を務め、誰よりも説法を聞いたという意味で「多聞第一」と呼ばれます。ただ、仏伝で描かれている阿難は悩み多き方でありまして、お釈迦様が亡くなられた時には、まださとりを開いていない。ずっと教えを聞いてきたにも関わらず、「自分はまだ何も分かっていない」とお釈迦様の死を悲しんで泣いているところを、同じ仏弟子である摩訶迦葉に一喝されるというエピソードも伝えられています。

ところが、「教巻」で引用される『無量寿経』「発起序」では、そうではありません。阿難は今まで見てきたお釈迦様とは全く異なるお釈迦様に出遇って気がつき、驚いて立ち上がる。つまり、阿難はお釈迦様が生きている間に出遇うことができた形にしてあるのです。前に触れた仏伝との矛盾を考え、「これは作り話ではないか」と疑問を持つ方もおられるかもしれませんが、例えば、生きている時には喧嘩ばかりであったけれども、亡くなった後にその人の言葉が聞こえてきて出遇い直すということがあります。大切なのは、その出遇いが命日の前か後かということではなく、出遇えたことが何だったのかということでしょう。『無量寿経』は阿難がお釈迦様の何に出遇ったのかに絞られているのです。

さて、立ち上がった阿難は自身が出遇ったお釈迦様の瑞々しいお姿を述べていかれるのですが、注目したいのは次のお言葉です。

去来現の仏、仏と仏と相い念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。

（『聖典』一五三頁、一部加筆）

この「過去も未来も現在の仏も、仏というのはお互いに念じ合う存在だ」というのが「仏仏相念」という言葉です。つまり阿難はこれまでお釈迦様を「仏仏相念している方」とは見ておらず、「さとりに到達なさった素晴らしい方」というイメージを握っていたわけです。ここで言われる「未来の仏」は分かりにくいかもしれませんね。弥勒菩薩を代表とし、未来にも仏は出るのですが、まだ仏になってはいません。大きく言うと「未来の仏」とは、まだ仏になっていない方をもお釈迦様は仏として仰ぐ眼をもっておられた、そういう眼で人々を見ておられたということです。

例えば、お釈迦様は阿闍世や韋提希という、家族の問題でぐちゃぐちゃになった方々に文句を言われながらも、どこまでも寄り添い続けられた。それは縁が熟すれば人は必ず仏に成るという法をお釈迦様が信じておられるからです。仏に成るか否かは素質の有無で決まるのではない、だからこそお釈迦様はどんな人を見ても「あの人は素質が無い」とは言わないのです。そういう意味で、「過去・未来・現在の仏を念ずる」というのは、仏は全ての存在を仏として仰いでいると言い直しても良いと思います。人間はそんなふうには言えません。

『無量寿経』に戻りますと、阿難は今までお釈迦様を仏陀と見る一方、「自分はまだ全然ダメだ」と、縦に序列を付けて人間を見ていたのです。しかし、お釈迦様は「阿難、あなたも仏に成る」という世界を念じておられるわけです。能力や経歴など関係無く、誰のうえにも開かれる法を説いておられた。そこに阿難は初めて気が付いたということです。

知ることを得る

学生から「誰もが平等に仏に成るなんて理想論だ。現実的には、修行した人・能力がある人でなければ無理だ」と言われたことがあります。私自身「阿難の問いはそういうことか」と教えられました。つまり阿難が「私は仏に成れない。仏とはお釈迦様だ」という図式で考えている間は、いくら「あなたも仏に成る」と言われても「ご冗談を」で終わってしまいます。だからこそ、阿難の出遇いが大切なのでしょう。それが機縁となってようやく、お釈迦様は『無量寿経』を、阿弥陀仏の本願を説くことができたのです。

そして、このことを宗祖は「教巻」において、

何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば

（『聖典』一五二頁、点ルビ加筆）

と述べていくのです。「出世の大事」とは、「お釈迦様はこのこと一つのために世にお出ましになった」ということであり、「出世本懐」という言い方をされることもあります。ここで大変重要なのは、聖人が「何をもってか出世の大事なりや」とお書きにならず、「知ることを得る」という言葉をわざわざ付けておられる点です。つまり、「お釈迦様の出世本懐は何か」と尋ねているのではなく、「出世本懐をどう受け止めるか」ということをおっしゃっているのです。出世本懐を知識として知ることと、私の救済のために仏はお出ましになったのだ

と頷くこととでは、全く話が違うでしょう。

阿難も、これまでお釈迦様の説法を直接聞き続けてきて、その教えを知ってはいたけれども、そのお心に頷けなかった。それが『無量寿経』では自分の勘違いに気づき、出遇い直していかれたのです。その一方で、どこまでも頷くことができなかったのが提婆達多でしょう。有名な話では、提婆達多は「教団の後を私に任せてください」と申し出て、自身が僧伽を束ねる許可を求めます。それに対してお釈迦様は「舎利弗や目連にも譲るということがないのに、どうしてあなたに譲れようか」と叱るわけです。でもこれは提婆達多が嫌いだったからというわけではありません。跡継ぎにふさわしいと言った時点で、お釈迦様が信じる法から遠く離れてしまっているのです。もしかしたら提婆達多は責任感から教団のその後について発言したのかもしれませんが、多くの弟子の中から跡継ぎを名乗り出るということは「自分こそはお釈迦様に一番近い」ということ、換言すれば「他の者よりも自分は優れている」ということでしょう。お釈迦様を最上位とすれば、自分は第二位となり、その後には第三位、第四位という序列社会を生み出してしまうのです。

そういう意味で戻れば、阿難はお釈迦様の出世本懐を知ることを得たのに対し、提婆達多は知ることを得ることができなかった。だからこそ「お釈迦様はなぜ自分に教団を譲ってくれないのか」と散々苦しむわけです。では、私たちはどうでしょうか。阿難・提婆達多、どちらの方にいますでしょうか。お釈迦様を上位において「だいぶ近づいてきたぞ」と思っているならば、これはやはり提婆達多なのです。お釈迦様は誰もが平等に仏になるという水平の法を説いてくださっているのであり、このことがはっきりしなかったならば、仏教は勉強して高く上がっていくというものに必ず堕ちていくのです。この問題がお釈迦様の教えを直接的に聞いた人のうえにも起こっているということは、非常に重要だと考えます。

真実の〝教〟はどこにあるか

時に、「お釈迦様の出世本懐が語られていることこそ、『無量寿経』が真実の教えであることの証しだ」という意見を耳にすることもありますが、私はそれだけでは不十分だと思います。例えば、出世本懐は『法華経』にも「仏は一大事の因縁をもって世に出現する」という内容で説かれていますが、こちらのほうが広く知れ渡っています。ですから、出世本懐の有無だけで考えるならば、「では『法華経』と『無量寿経』と、どちらが本物なのか」というような、凡夫がお経を判定していく話になりかねないのです。もう一度、「教巻」をご覧ください。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。この経の大意は

（『聖典』一五二頁）

ここは絶対に気を付けなければならない部分です。聖人は「真実の〝教〟を顕」すならば、とりもなおさず『大無量寿経』であるとおっしゃっています。決して「真実の〝経〟」ではありません。「真実のお経と、そうでないお経」という判定ではなく、「ここが他より優れているから『無量寿経』は真実だ」という経典のランク付けでもない。聖人は『無量寿経』における阿難とお釈迦様との出遇いの事実を通して、言い換えれば、お釈迦様の出世本懐を「知ることを得る」（その心に頷く）ことを通して、真実教を示そうとしておられるのです。誤解を恐れずに言えば、「真実の教えはどこにありますか」と問われたならば、「知ることを得」たところ、つまり、聞いた人のうえにあると言うことができると考えます。

親鸞聖人は「お釈迦様が説かれたから真実教だ」と言いたいわけではないでしょう。お釈迦様がお説きになられた大事な教えを、間違いなく阿難が受け止めた。聖人が「教巻」の始めに引用される『無量寿経』の文章には、このように響き合う両者の関係が窺えます。「阿難、私もそのことを言いたかった」と、お釈迦様は説きたかったことを、ようやく説くことができた。そのようにして初めて、説法は成り立っているのです。「今日は誰もが仏になる法を説く」とお釈迦様が言われても、「それは無理に決まっている」と阿難がずっと握っていたならば、その教えは素通りしていきます。だからこそ、大事な教えが目の前に開かれていたとしても、その教えにご縁をいただくということは本当に「難中の難」なのです。そういう意味で、「仏のお心を知ることを得る」（説法が成り立つ）ということは、真実の教えが顕になった証拠だと言えます。両者は決して別物ではないのです。

このように、親鸞聖人は始めに「教巻」で、「仏にお遇いしないままで仏教とは言えないのではないか」ということを確かめておられると思うのです。そしてこのことは、諸宗の仏教者が問うてこなかったことでしょう。諸宗の先学は「お釈迦様は仏陀である」という部分に注視し、厳しい修行や様々な聖教を学ぶことを通して、「仏教」を規定してこられた。しかし聖人は『無量寿経』の阿難の出遇いを通して、「仏の願いをいただくということがなかったら仏に出遇うとは言えない」ということ示したうえで、「真実教」を明らかにしていかれたのです。

言葉を調べれば、「『無量寿経』で釈尊の出世本懐はこう説かれている」と勉強することはできます。しかし、そのことが自分とどこで重なるかが問題なのです。「私のためにお釈迦様はお出ましになった」という頷き、誰もが仏になることを願う仏との出遇い、そういったものが無いと、お釈迦様を上位に置いて「私はまだまだだ」ということになってしまう。「まだまだ」ということは謙虚に見えますが、裏を返せば、「今は負けているけれど、そのうち勝ってやる」という根性の現れでしょう。つまりそれは、仏教の言葉を駆使しながらランク付けしているのであり、「共に仏に成る教え」からは遠く離れたものだと言わざるを得ません。

【文責編集部】

現代社会と真宗教化

希望とは何か
―牛と荒野と放射能の中で

希望の牧場・ふくしま 代表　吉沢（よしざわ）正巳（まさみ）さん

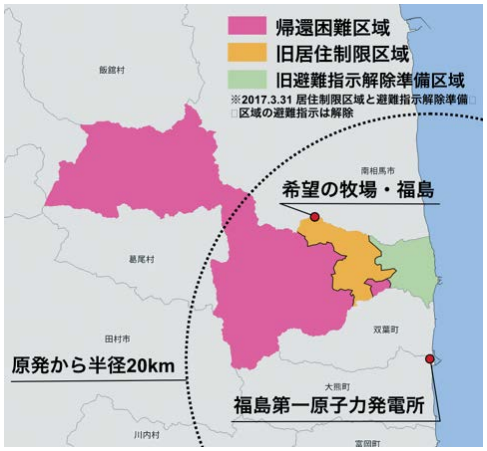
東日本大震災から九年余の月日が流れた。私たち一人ひとりにとってあの震災、原発事故は一体何だったのかという問いすら、風化してはいないだろうか。二〇一九年七月十六日、名古屋教務所議事堂において、今も高い放射線量を計測する牧場で被曝した牛たちとともに生き続ける「希望の牧場・ふくしま」の代表・吉沢正巳さんから復興の影にある福島県の現状をお聞きした（でらボラNAGOYA主催）。

復興とは何か、いのちとは何か、希望とは何か。吉沢さんの言葉に触れて、改めて念仏者一人として世間に対峙し、問い続ける宗祖の姿が強く想起させられた。ここに抄録を掲載し、今一度震災を問い直す一助となることを願います。

復興の裏にある浪江町の現実

私の牧場は福島県浪江町と小高地区との境界上にまたがり、福島第一原子力発電所（以下、原発）から北西方向に直線距離で十四㎞、封鎖された警戒区域二〇㎞圏内に位置します。標高八〇ｍほどの小高い場所なので、牧場からは原発の排気塔を全て望むことができます。

図にあるオレンジの場所は旧居住制限区域といい、現在は帰ることができるようになりました。ピンクの場所は放射線量が非常に高い帰還困難区域です。浪江町の面積の八〇％がこの帰還困難区域にあたるため、かつて二一，五〇〇人いた浪江の住民のほとんどはそこに我が家があるのに帰ることができず、散り散りになって暮らしています。恐らく生きている内に自宅で再び生活することはできないでしょう。すでに屋根瓦は崩れて雨漏りし、敷地に野生動物が入り、とても住める状態ではありません。だから多くの住民は故郷からの移住を決断しました。これが浪江町の現実です。いつか全面避難解除されたとしても、一体何が復興なのだろうかと疑問を禁じ得ません。



浪江町に出された避難指示区域

あの日　あの時

二〇一一年三月十一日、外出先で被災した私は急いで牧場に戻ると、電気と水道が止まっていました。私の牧場では福島県二本松市にある有限会社エム牧場の黒毛和牛三三〇頭を預かって繁殖・育成をしていました。体の大きな牛たちにとって水が飲めなくなるということは、餌がない以上に死活問題なのです。余震が次々に襲う中、すぐにディーゼル発電機を回し、住居の水道管にホースを繋いで牛たちが水を飲めるように作業をしました。

そうこうするうちに日が暮れ、原発の上空をヘリコプターが何機もぐるぐると旋回を始め、その爆音が牧場まで響いてきました。近隣の状況を知ろうと壊れた道路や倒れたブロック塀を避けながら町役場の方へ行くと、体育館には避難者が大勢集まり、消防庁舎前では煌々と投光器の明かりが灯され、見たこともないエアドームが建てられていました。帰宅後、カーナビゲーションでテレビを見ていると、原発から半径三㎞圏内に避難指示が出され、もうすでに原発が大変な状況になっていることを知りました。

翌十二日早朝、町に防災無線の音声が響き渡り、全町避難が始まりました。ヘリの爆音と「逃げろ！」という避難放送が入り混じる中、町民が一斉に避難を始め、渋滞で身動きがとれずに数珠繋ぎになった車列が牧場から見えました。十五ｍの津波に襲われた請戸漁港へのレスキュー隊派遣は中止され、二百人もの津波犠牲者を置き去りにして、浪江の人たち約一万人が山の方へ逃げたのです。

そんな騒然とした状況の中、赤灯を回した三台のワゴン車に乗った福島県警の通信部隊の人たちが牧場に入ってきました。原発上空を飛ぶ県警のヘリが撮影したライブ映像を中継するためのアンテナを牧場の土地に建てさせてほしい、とのことでした。許可をすると、発電機を回しながら十人がかりでパラボラアンテナを組み、中継を繋いでいました。すると十五時頃、一号機で起こった爆発シーンを捉えたのです。すぐに県警本部から「撤退しろ」という命令が下り、通信部隊は「申し訳ないが我々はここで引き上げます。来るべきものが来てしまった。もうお終いです」と私に告げて引き上げていきました。

いのちの選別

三度の爆発を起こした原発事故により、町民は生活の全てを置き去りにして避難せざるを得ませんでした。しかし私はエム牧場の村田社長と相談し、牛たちを見捨てないと決めました。半径二〇㎞圏内の道路は封鎖されていましたが、警官が立っていない峠道を抜け、バリケードをずらしたり壊したりしながら、二人で牛たちに餌を届け続けました。私たちは何度も警察に捕まっては、誓約書や始末書を書きました。しかし私は牛飼いです。牛を見捨てたら、もう牛飼いには戻れません。私たちは餌を運ぶ道中、他の牛舎で死んでいく多くの牛たちを見ました。牛たちは牛舎に繋がれたままガリガリにやせ細って死んでおり、同じ牛飼いとして様々な思いが込み上げて、胸が痛みました。そして一体何のために、被曝してもう商品価値がなくなってしまった牛たちを生かし続けるのかと苦悩しました。

原発事故後、国は警戒区域に残された犬や猫などのペットに対するレスキューを認めました。しかし家畜に対しては二〇一一年五月十二日、全頭殺処分という指示を出しました。国はいのちの選別を

牛舎に繋がれたまま残された牛たちは何を思って死を迎えたのだろうか　※撮影 Masakane Kinomura

したのです。農水省と県の家畜保健所の職員が、封鎖された警戒区域の中で約千八百頭もの牛を延々と薬殺しては穴に埋めていました。

私たちはこのような国の動きに対して「希望の牧場・ふくしま」というプロジェクトを立ち上げ、原発事故による放射能汚染の生きた記憶として、被曝牛とともに生きることを決意しました。立ち上げ当初には近隣の牧場の牛も預かり、約四百頭の牛たちが国の方針に反して生き残りました。

牧場は空間線量の高い地域であり、牛が食べる牧草も高い値で放射能汚染されています。一年ほど経った頃から、黒毛和牛の体に一斉に白い斑点のようなものが現れました。農水省や文科省に「なぜこのような現象が起きるのか調べてください」と申し出ても、しっかりと調査してくれません。なぜなら、福島県の復興や全国の原発再稼働という国策に対して都合が悪いからです。子どもたち二百人の甲状腺がんと原発事故との因果関係を今も認めないように、国は都合の悪いことに蓋をしていくのです。

希望とは何か

私たちは牧場において、復興の裏側で今も続いている原発事故の被害や、いのちとは何かということを牛たちを通じて皆に知ってもらいたいのです。人のいのち、犬猫ペットのいのち、家畜のいのちなど、震災以降、様々な場面でそれぞれのいのちとの向き合い方がありました。飲料水の確保や日々の搾乳が困難なために殺処分を決断せざるを得なかった酪農家の人たちは「お前たちの牛を殺せ。全部死んでくれなければ、俺たちがバカをみるじゃないか」と怒りました。

このような切なく答えのない言い合いを幾度も繰り返し、私は正しさとは何通りもあるということに思い至りました。言い合いを乗り越えて、未来に向かって互いの立場や言い分を認め合って、正しさの多様性を理解し合っていくことが大切だと思うのです。

牛の体表に点々と現れた白斑は、原発事故前には全く見られなかった

私たちは「希望の牧場」という名を旗印にして頑張っています。放射能に汚染されたこの地で、国策に反して牛を生かしてきた活動に多くの方から反響の声をいただいています。しかし、ここは絶望の場所です。人間が暮らすことのできないこの場所で、静かに命を終えていく牛を見送る時、自分の活動や希望という言葉に深い虚しさを覚えます。しかし大切なのは、この絶望の中からどのように希望を紡いでいくのかということです。希望は与えられるものでも用意されるものでもありません。誰かの言いなりではなく、自分の問題として自分で考え、行動したその先に見出され、生み出されるのだと思うのです。

3・11を終わりにしない

あの原発事故を経た今も、関東全域の電力の1／3は福島県が支えています。それにも関わらず、十六万人の福島県民が「放射能ばい菌だ」「福島から嫁をもらうな」などと言われています。震災関連死は浪江町だけで四百人を超えています。ガソリンをかぶって火をつけたり、ダムに身を投じたり、切腹をしたりと、自ら命を絶った方も大勢います。このような福島県の犠牲や差別の上に、首都圏の生活は成り立っているのです。福島県は電力供給の植民地であり、地図に塗られたピンクやオレンジは私たちに対する差別のレッテルなのです。

私たちはこれらの現実と折り合いをつけて生きていかなければなりません。だからといって口をつぐめば次第にそれが当たり前となり、原発事故はもう終わったことだとみなされます。もう汚染水の放出も始まろうとしています。様々な放射性物質が混ざった汚染水百八十万トンが海に放たれて、どうして福島の漁業の安全・安心が成り立つのでしょうか。なぜこのような現実にあって全国の原発再稼働が始まるのでしょうか。

3・11の教訓を活かして、皆さんに自分たちの居場所はどうなるかということをちゃんと考え、行動してほしいのです。皆さんは南海トラフの地震や津波に対してどのような備えをしていますか。自分が住んでいる場所は安全地帯だと思い込んでいませんか。考えたくない、見たくない、聞きたくない、関わりたくないと、いつだって他所事、他人事というスタンスでいませんか。3・11は、どこか遠い所のかわいそうな人たちの話ではありません。3・11は終わっていないのです。終わりにしてはいけないのです。そのために、私はこれからも復興の裏で見捨てられようとしている現実を表現し続けていきたいと思っています。

（了）

◇ぜひ希望の牧場を訪れてください！
〒979-1501福島県双葉郡浪江町立野春卯野157
電話：090-1279-2106　FAX：03-4586-7119
E-Mail: kibouno.bokujyou@gmail.com

研修報告

第十三期研究生 報恩講勤修
わたしにとって「報恩講」とは？

一月二十七日、第十三期研究生による報恩講が勤修された。僧籍の有無を問わず、研究生が「和讃」の巡讃と『御文』の拝読担当をつとめ、勤行後には「わたしにとって報恩講とは？」をテーマとした感話が行われた。

今号では、その感話にて提示された内容の一部を紹介し、研究生たちが報恩講を通してどのような課題をいただいたのかを、読者の皆様と共有する機会としたい。なお、話の背景や思いが、より皆様に伝わることを願い、研究生の名前の前に「僧侶」「門徒」という事柄をあえて記入した。

お世話方によって報恩講の準備が既に整えられている、あるお寺でのこと。お世話方ではない、一人の参詣者が「報恩講だから」と、手作りの品を届けておられるのを目にした。その姿から「報恩講はお寺さんや役員だけで行われる行事ではなく、一人ひとりの門徒によって作られるものなのだ」と気付かされた。

お勤めはお寺さんだけのものではないのだから、門徒である私も、下手でも大きな声でお勤めすればいい。ましてや「門徒である自分はお客なのだ」とひがむ必要も無い。報恩講は、私にできる形で参加できる場、参加して良い場なのだと感じた。

門徒　長谷川（はせがわ）　由美（ゆみ）

親鸞聖人のご命日を縁として、本当の教えに出遇っているかどうかを確かめ、自らの生活を振り返り、今日まで伝えられてきた本願念仏の教えに対して報恩感謝する。報恩講は、我々真宗門徒にとって、一番大切な法要であると思っている。

私が所属する組の門徒は毎年、名古屋別院報恩講の助音に付いている。これは二十年程前から続いていて、昨年は三十名程が参加した。着座楽・伽陀から始まり、広い本堂に「正信偈」が響き渡る中で勤めた助音。感動を覚え、心に響き渡る報恩講だった。「真宗門徒は報恩講に始まり、報恩講に終わる」と言い伝えられている。別院報恩講を勤め終えたばかりなのを寂しく感じて、今年の報恩講を待ち遠しく思う。

門徒　服部（はっとり）　博司（ひろし）

報恩講は、私のこれから進むべき道と行く場所（立脚地）を、先人が気付かせてくれるものである。念仏の教えを聞いていくということは、その先人たちに対する恩送りだろう。

「恩」には、知恩（恩を知る心）、感恩（恩を感じる心）、報恩（恩に報いる心）の三つがある。報恩講が御同朋の皆さまと共に聖人の教えに出遇う場となっているか、私自身が問われているように思う。

門徒　大島（おおしま）　善信（よしのぶ）

私は五年前に得度したことをきっかけに、所属する寺で出仕するようになった。その際、衣を身に着けて歩いていると、門徒さん方は深々と丁寧に頭を下げられる。そのことに困惑すると同時に、僧侶としてもっと精進しなければいけないとつくづく思う。

このような出仕する際の気持ちにおいては、報恩講も他の法要も差は無い。しかし、報恩講がお寺にとって最も重要な行事であるように、私にとっても一年を通じて最も重要な課題を賜る法要であると感じている。

僧侶　松林（まつばやし）　克紀（よしのり）

報恩講に対して、正直な気持ちを言えば「普段から念仏を称え、恩に報いているのに、なぜこんなにも大げさな儀式が必要なのだろうか」と疑問を感じていた。しかし、報恩講期間の別院境内は、いつもとは異なる高揚感が漂っていると気付いた。そして記憶の中から、ある一場面が頭に浮かび、豊かな心持ちになった。

それは私と娘と母に関連した出来事。ある時、娘が困難な事柄に直面して、涙ながらに電話をかけてきた。居ても立ってもいられなくなり、離れて暮らす娘のもとへと行こうとしたのだが「絶対に来てはダメ」と断られた。娘は私の心を察するかのように「大丈夫、自殺はしないから」というのだが、私の心のざわつきは収まらない。そこで九十歳を過ぎた母に電話したところ、事情を聞いた母は「あなたが仕事をしている間、私が線香を絶やさない。仕事が終わったら、あなたは寝るまで線香を焚きなさい」と言う。母の強い口調に押されて言われたことを実行すると、当初は色々な考えが浮かんできたのだが、線香を焚き、静かに座ることを通して日ごとに落ち着き、「娘を信じよう」という確信が持てた。その後、この状況を振り返るたび「あれが母の生き方なのだ。自分の拠り処を持っている人はどんなことにも動じない。そして線香を焚くなどの自然な形を通して、他人に寄り添う智慧がでてくるのだ」と信心の大切さに気付かされた。

お勤めは「正信偈」草四句目下　次第六首

このことを思い出しながら、「報恩講という場も、色々な思いの人が集まり、それぞれが気付いたり、気付かされたりするきっかけを作っているのだ。あったほうが良い行事なのかな」と、今は思い始めている。

門徒　髙橋（たかはし）　律子（りつこ）

研究生になったことがきっかけとなり、私は初めて別院報恩講にお参りした。しかし、私が子供だった時分、祖母が別院の手伝いをしており、「ほうおんこうさま」の話をよく聞かされていたことを思い出した。

今思うと、人は皆、繋がっているのであり、縁とは不思議なものだと強く思う。こうして研究生として皆さんと出あい、仏教を学ぶことが私の運命であったかと思うと、親鸞聖人への感謝の思いが出てくる。

門徒　木村（きむら）　幸夫（ゆきお）

若い頃は、報恩講はお寺で行われる行事の一つにすぎなかった。世話役が回ってきた際にはお賽銭の当番などでお寺に行き、また護持費や本堂の修繕費という負担もあり、少しでも逃げたいという気持ちばかりだった。そして、そのように考えている人は多いと感じる。友人に「今日はお寺へ説教を聞きに行く」と言うと「そんなに宗教をやって、何か家族に不幸なことがあったのか?」と不思議がられる。毎月の命日にお寺さんにお参りに来てもらっている友人でも、こうなのである。私が「なぜお説教を聞きにいかないんだ」と責めるように言うと、引かれてしまう。どうも私は、少し変わり者に見られているようだ。

さて、私は今、手次ぎ寺の報恩講の準備を手伝い、当日は助音につき、法話を聞くことを楽しみにしている。ただ、各門徒宅でのお内仏の報恩講（お取越）が減ってきていることが気になる。本山の報恩講が勤まり、別院、手次ぎ寺、そして各家庭が勤めて報恩謝徳の行事が完結するのではないだろうか。儀式と教学のバランスが取れて、浄土真宗は健全だと言えるのではないかと思う。

門徒　原田（はらだ）　育男（いくお）

『御文』（聖人一流）のご拝読

私は大谷派教師を目指した時から、自坊を含めた縁あるお寺の報恩講にお参りをするようになった。その経験を通して考えてみると、私は報恩講を三種類の「場」として捉えていると思う。

一つ目は「好きなことを堪能する場」。私はお勤めをすることも聞くことも好きだ。優劣を付けることはできないが、きれいだと感じるお勤めに出あった時には感動を覚える。また以前、別院報恩講のお勤めを参詣席で聞いた時には、皆が張り合って声を出し、競い合っているという印象を受けた。しかし、出仕して、お勤めする一人ひとりの声を間近で聞き、自分の限界まで精一杯声を出しておられるのだと感じ、印象が大きく変わった。

二つ目は「リサーチの場」。色々なお寺にお参りに行くと、お勤めやお斎、法話の違いが窺える。特に法話は話す先生によって内容や話し方などが異なり、大変勉強になる。

三つ目は「確認の場」。「報恩」とは「仏恩に報いる」「仏恩を知る」ということを耳にするが、本当の意味では理解できていない。だからこそ、報恩講を勤修する意義を、何度も足を運びながら尋ねていきたいと思う。

僧侶　鈴木（すずき）　日奈子（ひなこ）

私はこれまで毎年、別院報恩講に何日間かお参りしてきた。報恩講は私にとって、大勢の懐かしい御同行に一度に出あえる楽しい場であり、大切な教えをまとめていただくことができる充実した場であると感じていた。

しかし今年は報恩講期間と身内の入院とが重なり、足を運ぶことができなかった。今回お参りできなかった報恩講を通して、今までの自由な時間の中で本当に大切な御縁をいただいていたこと、自分の身は自由や時間に限りがあるのだということを改めて実感した。そして、だからこそ、御縁のある限り、急いで聴聞しなければいけないと思った。

門徒　石原（いしはら）　厚子（あつこ）

報恩講にお参りすると、不思議で新鮮な気持ちになる。得度をし、出仕してお勤めするようになってからは、一層心が引き締まる思いがする。

また報恩講は「親鸞聖人はどんな人だったのだろうか」「聖人が残してくださったたくさんの教えを一つずつ学んでいかなければ」と思う時間でもある。

僧侶　大橋（おおはし）　眞佐子（まさこ）

別院報恩講期間中、毎日晨朝にお参りした。しかし、いつもとは異なるお勤めについていけず、声明の本を買っても開き方が分からない。もともとは「馴染みのない声明を聞きたい」と思いお参りしたのだが、周りでお勤めしている方を見て、自分も一緒にお勤めできるようになりたいと思った。

きれいな声明を聞いていると気持ちがよく、入楽のお勤めはおごそかな気持ちになる。そのようなお勤めと共に、「和讃」などの意味内容を味わい、親鸞聖人への謝徳の気持ちを確かめられたと言えれば恰好いいのだが、実は声明を聞くだけで満足し、報謝のお勤めができなかった。その意味では、未だ報恩の「講」に参加できていないのかもしれないと思う。

門徒　橋本（はしもと）　有司（ゆうじ）

新型コロナウイルス感染症に伴う 教化センターのご利用について

新型コロナウイルス感染拡大による愛知県における緊急事態宣言の発出に伴い、教化センターは来館者および職員の感染予防・拡大防止に努めるために4月16日から臨時休館しておりましたが、緊急事態宣言の解除に伴い、感染予防策を実施した上で、6月1日より通常業務を再開しております。

つきましては、ご来館の皆様に、下記の感染予防策へのご協力をお願いしております。

① 発熱など体調が優れない場合は、来館をお控えください。
② 入館の際、入口の消毒液で手指の消毒をお願いいたします。
③ 可能な範囲でのマスクの着用および咳エチケットにご協力ください。
④ 座席をご利用の際は、間隔を空けてご着席ください。
⑤ 定期的に換気をいたしますので、ご了承ください。

当面の間、皆様にはご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解ご協力くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

2020年度 聖典研修 『教行信証』撰述の願い

前年度に引き続き、一楽真氏（大谷大学教授）を講師にお招きします。なぜ宗祖は『教行信証』を著されたのか、そこに願われた宗祖のお心をともにいただいてまいりましょう。

日　程　第1回　9月14日(月)
　　第2回　11月9日(月)
　　第3回　1月18日(月)
　　第4回　3月8日(月)
　　第5回　5月10日(月)

時　間　午後6時～午後8時
会　場　名古屋別院 対面所
聴講料　1回500円
　　(教師陞補のための聴講証発行)
テキスト　『真宗聖典』
　　(名古屋教務所にて購入可)

*新型コロナウイルスの感染状況により、日程・会場等は変更になる場合があります。最新情報はＨＰ「お東ネット」でご確認いただくか、教化センターまでお問い合わせください。

INFORMATION

教化センター日報
■2020年３月～５月

4月7日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」会議 後援
16日 緊急事態宣言の発出に伴う臨時休館(～5月31日)

【新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止または延期となった主な事業】
3月2日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
9日 研修業務「聖典研修」⑤(一楽真氏)
14日 研究業務「平和展」特別学習会(神野哲州氏)
17日 研究業務「第31回平和展」(～23日)
4月2日～4日 名古屋別院「晨朝法話」(第13期研究生 有志)
6日 研修業務「第13期研究生 課題学習」④
15日 研修業務「第13期研究生 聖典講読」⑥
5月11日 研修業務「聖典研修」⑥(一楽真氏)
26日 研修業務「第13期研究生 課題学習」⑤

第31回平和展 開催中止について

3月17日から23日にかけて第31回平和展「真宗大谷派の海外侵出－朝鮮開教－」の開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、現状では来場者の安全を確保することが難しいという判断から、開催を中止いたしました。ご来場を予定してくださっていた皆様には、この場を借りて深くお詫び申し上げますとともに、何卒ご理解賜りますようお願いいたします。

第31回平和展の研究成果の発表は、パンフレットの発行をもって代えさせていただきます。ご希望の方には無償で進呈いたしますので、教化センターまでお問い合わせください。

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ［お東ネット］http://www.ohigashi.net
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。 お東ネット 検索

教化センターの人事がありました

〈新任〉
非常勤嘱託　田中 真理（2020年4月1日 付）

〈異動〉名古屋教務所へ
事 務 嘱 託　服部 岩光（2020年4月1日 付）

《雑感》

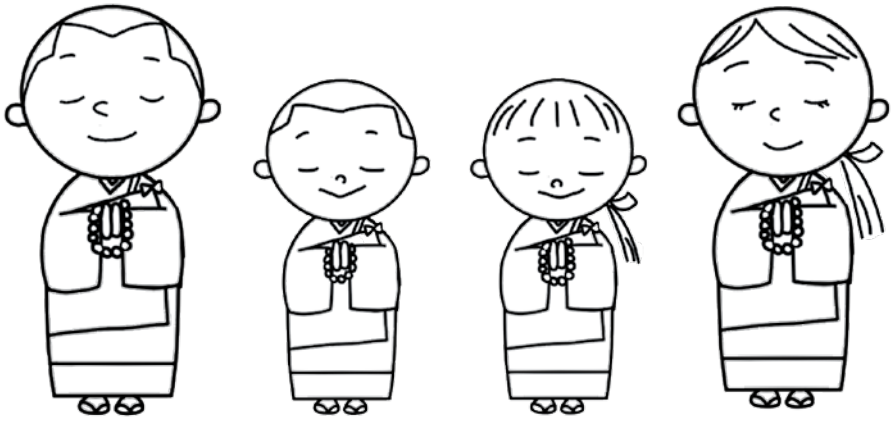
三密(密閉、密集、密接)回避が呼びかけられ、家族以外の人と食事をする機会が減った。ただひたすらに孤独に食べることのみに時間を費やす生物(例えばイモムシなど)がいる中で、人にとっての食事とはどんな意味をもつのだろう。他者とのつながりを感じ、確かめ、共働・共生していくために必要不可欠な行為なのだと気付かされる。あらためて、人は密集・密接を好む生き物なのだと思う今日この頃、自坊報恩講のお斎が気がかりだ。
(K.H.)

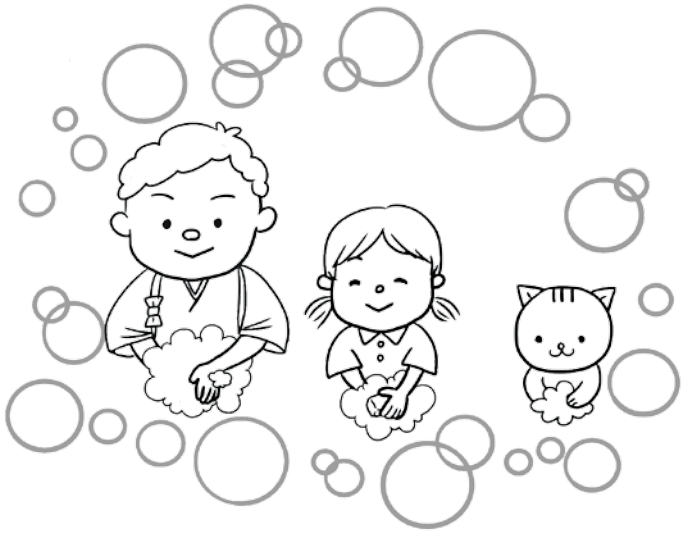
■教化センター

〈開　館〉月～金曜日 10：00～21：00
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。





- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまで
  お知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。

発行／真宗大谷派名古屋教区教化センター（No113）